

万葉集の大阪

中央図書館長 村瀬憲夫

近畿大学の立地する大阪府には、たくさんの万葉歌が残されています。1300年余の歳月を経て、地形も大きく変わり、また絶え間なく打ち寄せる都市化の波を受けて、大阪の万葉の故地は大きく変貌しています。とはいえ、万葉の故地に立って、少しの想像力を働かせてみましょう。万葉歌の核心が立ち上がってきます。限られた誌面ですが、しばし読者の皆さまとご一緒に「古代妄想」の世界を楽しんでみたいと思います。

まず次頁に掲げました2つの大阪の地図を較べてみましょう。古代から現代へ、最も変貌著しいのは、海岸線です。古代は海が「上町台地（丘陵）」の裾までできていて、住吉大社は海に面していたことがわかります。なるほどそれで祭神が海神なのだと得心がいきます。また上町台地の東側も、生駒山の裾あたりまで、海ないしは湿地帯でした。近畿大学の住所が「小若江」（古代の河内国の郡名「若江郡」に由来します）、もよりの駅が「長瀬」、その隣が「弥刀（水門の意でしょう）」と、水に関係の深い地名が多くみられますのも、なるほどと得心がいきます。

そのようなわけで、万葉集の大阪を考える時、「海」がキーワードのひとつとなります。

ながのいみきおきまろ みことのり
長忌寸奥麻呂、詔に应ふる歌一首
大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととの
ふる海人の呼び声 （巻三、二三八）

この歌は、天皇の命（詔）を受けて詠まれたものです。古代の地図でご覧の通り、大宮（難波宮、今はナンバですが、当時はナニハでした）の近くまで海がきています。ですから

海岸で練り広げられている、地引き網を引くかけ声が、大極殿まで飛び込んできたのですね。

現在、難波宮跡は史跡として残されています。大極殿のあったところには、コンクリートの土壇？が作られています。そこに立って周囲を眺めてみましょう。目の前には大阪歴史博物館とNHKの合体した建物が聳え、周り是一片のビルの群れ、少し離れて大阪城も見えます。そしてビルの裾をめぐるように高速道路が疾駆し、車の騒音がうねりをなして耳に至ります。「海人の呼び声」など聞こえようもありません。

でも古代の地図も見ながら、大宮の西に広がる青い海、遠くにかすむ淡路島、そしてすぐ近くの難波津での出船入船の賑わいを想像してみますと、この歌の趣もぐんと身近なものとなってくることでしょう。



「難波宮跡」（背後右手に大阪城）

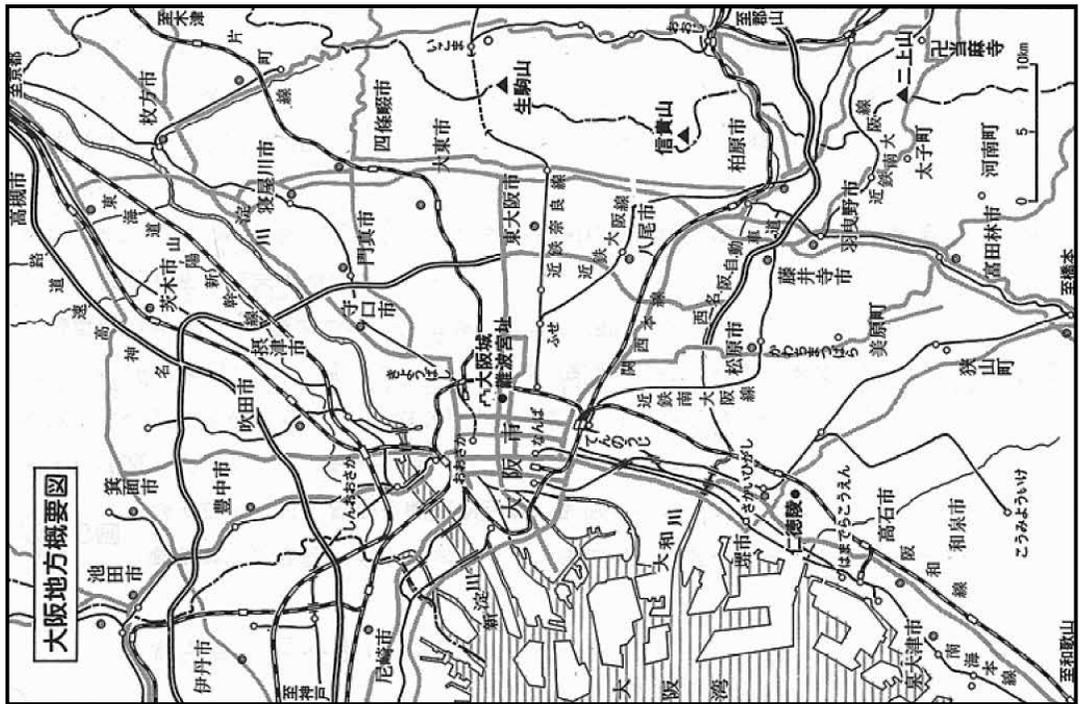
さて、この歌は詔に应えて詠まれたのですから、その意味するところは淡々とした風景描写のみではありません。かつて舒明天皇が、天の香具山に登って詠った国見歌で「海原は隅立立ち立つ」と、国土を讃えたのと同じく、「海人の呼び声」は、豊漁を、そしてその先に

「6-7世紀ころの摂津・河内・和泉の国」



日下雅義著『古代景観の復原』中央公論社
一九九一年

「現代の大阪」



井村哲夫著『万葉の歌人と風土』(⑤大阪)
保育社 一九八六年

国土の繁栄を言祝いでいるのです。

難波宮と難波津がセットとなって、この地は大きく発展しました。難波津は、当時であっては日本最大の港でした。この港から全国に向かって船が出、そして入ってきました。

宮廷歌人・田辺福麻呂は、難波宮と津を次のように讃えました。大宮人が永遠に通い続け、そして海人娘たちで賑わう海と港を控えた宮だったのでした。

あり通ふ難波の宮は海近み海人娘子らが
乗れる船見ゆ （巻六、一〇六三）

もちろん外国との接点もこの港でした。遣唐使も遣新羅使もここから出航しました。

大宝元年（701）に遣唐使の一員として、唐に渡った山上憶良は、彼の地にあつて、この地を思って、歌いました。

山上臣憶良、大唐に在る時に、本郷を憶ひて作る歌
いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松
待ち恋ひぬらむ （巻一、六三）
（さあ皆さん。早く日本へ帰りましょう。難波津を出る時に見送ってくれた浜の松たちが、今頃私たちの帰りを待っているでしょう）

遣唐使の旅は苦難に満ち満ちていました。ですから、一人息子を唐に遣る母親の切実な想いを詠んだ歌もあります。

天平五年癸酉、遣唐使の船、難波を
発ちて海に入る時に、親母の子に贈
る歌一首 并せて短歌 （長歌は省略）
旅人の宿りせむ野に霜降らば我が子羽ぐ
くめ天の鶴群 （巻九、一七九一）

過去の事象から判断しても、無事に戻って来られる保証はどこにもありません。大空を自由に飛び翔る鶴たちよ、どうかその翼で覆って、我が子を守っておくれと。

また難波津は防人たちの出航の港でもあり

ました。東国の国々からかり集められた防人は、難波津に集結し、ここから船に乗って九州へ向かったのです。働き盛りの男が任命され、向こう3年間の苦難の労役・軍役が始まります。そして残された家族にとっても悲惨な日々が待ち受けていました。

我ろ旅は旅と思めほど家にして子持ち瘦
すらむ我が妻かなしも

（巻二十、四三三四）

家一番の働き手を失った中で、たくさんの子供たちをかかえ、しかも税金が免除されないという過酷な生活は想像を絶します。ここで言う「旅」は、故郷を出てから、故郷に帰るまでの全期間を言います。「俺の旅は苦しいに決まっているから、仕方ないとして（と言って諦めがつくというわけでは決してないけれど）、家に残って子育てと税金に途方に暮れて、日々痩せ細っていく妻のことを思うと耐えられないよ」と歌います。

次の歌は、その防人の一人が、難波津、おそらく港を出航した船上から、白砂青松の海岸が延々と続く風景を見て詠んだものでしょう。

松の木けなの並みたる見れば家人いはびとの我れを見
送ると立たりしもころ

（巻二十、四三七五）

海岸に生えた松は、長年にわたる風・波・雪にさらされて、幹が真っ直ぐではありません。彎曲した姿が人の姿に似ています。そんな松の木の並んだ姿が、故郷を出立する時、家族（当時は大家族でした、これが最後の別れとなるかもしれないのですから、親戚の人たちもいたでしょう、近所の人たちもいたでしょう）が、ずらっと門口に並んで見送ってくれた光景と重なって見えたのでした。

では少し目を転じて、難波津から東に向かって、上町台地を突ききる人工の水路を見てみましょう。これは「難波堀江」と呼ばれ、

なんと仁徳天皇の時代に開鑿された運河なのです。上町台地の西に広がる「難波の海」と、台地の東に展開する「草香江」とをつなぐことによって、船の行き来を可能にし、また河内平野の排水の機能をも果たしたのです。現在の土佐堀川・堂島川に活着ている（木原克司氏）というのですから、機会を見つけて土佐堀川のほりに立ってみましょう。コンピュータグラフィックならずとも、当時の難波堀江が蘇ってきます。

では、難波堀江の歌を一首読んでみましょう。

さ夜更けて堀江漕ぐなる松浦船楫の音高
し水脈みづなづ早みかも（巻七、一一四三）
（夜更けに堀江を漕ぐ松浦船の櫓の音が高くはつきりと聞こえてくる。きっと潮の流れが速いからだろう）

この歌の作者は、地方から何かの役目を帯びて難波宮にやってきた役人でしょう。昼間の喧噪うしろが潮の引くようにかき消えた夜更け、遠く故郷を離れた仮寝の宿では、目も冴えてなかなか寝つかれません。と、夜の静寂しじまをやぶって船（松浦船は、九州の松浦地方で造られた船で、性能の高い船でした。ちなみに万葉集には、熊野船も詠まれています）を漕ぐ櫓の音が聞こえてきました。それはまるで耳元で漕いでいるような大きな音でした。潮干潮満ちによって潮の動く時は、堀江を流れる潮流は格別に早く、櫓の音が高いのはその潮流に抗して漕いでいるためでしょう。旅人の旅寝の不安と侘びしさと、そして難波堀江の臨場感が心に響く歌ですね。

ところで「水脈」は水の流れる筋を言い、そこから「濤標」という言葉と物が生まれます。淀川が運ぶ土砂のせいでしょうか、沖合の波が運んでくる砂のせいでしょうか、難波津は次第に浅くなっていきます。そこで船が通っても座礁しないための道しるべ（杭）を立てて、安全な航路を知らせます。それが濤標です。現在の大阪市の市標はこの濤標を

象ったものです。ことほどさように、大阪と海との繋がりはとても深いのです。

ちなみに、この濤標は「身を尽くし」とも書かれて、身が尽きてしまわんばかりの激しい恋心を意味します。濤標に導かれて、恋の深みにはまってしまったのでしょうか。

では難波津からもう少し南に下ってみましょう。そこが住吉です。現在は「すみよし」と呼びますが。万葉時代は「すみのえ」でした。

当時の難波宮、難波津辺りは、現代風にいえば「キタ」、そして住吉辺りは「ミナミ」といった趣きでしょう。

馬並めて今日吾が見つる住吉の岸の黄土はにぶ
を万世よろづよに見む（巻七、一一四八）

難波宮での公務を終えて、ひと息ついて、住吉に遊んでいる官人の詠でしょうか。あるいは難波行幸の折に、お供の者たちが詠んだ歌かもしれません。馬の轡を並べて「住吉の岸の黄土」を見に行っただけです。「埴生はにぶ」は、赤土や黄土など粘土の在る所を言いますが、万葉集の原文では「黄土」と表記されていますので、住吉の場合は黄色の粘土でした。

「今日吾が見つる」という言葉からは、今まで見たい見たいと思っていた黄土をやっと見ることができた、という喜びの気持ちが読みとれます。住吉の岸の黄土は、奈良の都にまで知れ渡った名所のひとつだったのです。実際、万葉集にはこの黄土を詠んだ歌が他にも見えます。



「住吉大社」

気の張る公務を終えて、旅先の名所を訪れ楽しんで、官人たちの開放された心のさまを垣間見ることができます。

あられ あられ すみのえ おとひをとめ
霰うつ安良礼松原住吉の弟日娘子と見れ
ど飽かぬかも （巻一、六五）

この歌の作者は天武天皇の皇子・長皇子です。慶雲三年（706）の文武天皇の難波行幸の折に詠まれた歌です。弟日娘子は、住吉の遊行女婦と推定されています。

目の前には、寒々とした住吉の浜の冬景色ー冷たく固い霰が頬を打っていましたーが広がっていたはずですが、この歌からは、霰が立てるパラパラパラという音と響き合うような、皇子の弾む心の高ぶりが聞こえてきます。これも弟日娘子の魅力と、住吉の地の開放的な雰囲気さがそうさせたのでしょう。

安良礼松原は、現在の大阪市住之江区安立町かと推定されています。住吉大社の少し南にあります。当時は白砂青松の続く海岸であったのですが、今はすっかり陸地化し海辺の趣きはありません。

もう一首、「ミナミ」の雰囲気が彷彿とするような歌をご紹介します。

すみのえ はづま
住吉の波豆麻の君が馬乗り衣／さひづら
ふ漢女を据ゑて縫へる衣ぞ
（巻七、一二七三）

この歌は5・7・7、5・7・7という句数構成を持っていて、旋頭歌と呼ばれます。旋頭歌は謡い物的な雰囲気を持つ歌が多く、とりわけこの歌では、二人の人が、掛け合い風にやり合っています。前半は「君」（万葉集では原則として「君」は女が男を呼ぶ呼称です）とありますから、女の歌でしょう。相手をからかっている口吻が伝わってきます。後半は、その歌いかけられた男が、からかわれていると知ってか知らずか、乗馬服を自慢している歌です。

波豆麻クンの馬上姿はなんと素晴らしいこと！乗馬服が素敵よ！ヨォ男前！
アリガトウ！本場の唐国から機織女を雇って織らせた着物だもんね！ドンナモンダイ！

この歌には、アッケラカンとした開放的な雰囲気がちこめています。二人の頭上には、明るいミナミの太陽がキラキラと輝いていたことでしょう。なお、波豆麻は地名だろうと考えられています。

以上、大阪の万葉歌を代表する、難波京・難波津の歌と、住吉の歌を見てきました。それでは最後に、難波京から平城京への道すがらに詠まれた歌を詠んでこの稿を閉じることといたしましょう。

みづのととり くさかやま
五年癸酉、草香山を越ゆる時に、
かみこそこのいみきおまろ
神社忌寸老麻呂の作る歌二首
なにはがたしほひ
難波潟潮干のなごりよく見てむ家なる妹
が待ち問はむため （巻六、九七六）
ただこえ
直越のこの道にしておしてや難波の海
と名付けけらしも （巻六、九七七）

題詞にあります「五年癸酉」は天平五年（733）、「草香山」は、東大阪市日下付近の山と思われま。万葉時代後期（710～759）は、都はおおむね平城京にあり、難波に都があった時期は短期間でしたが、平城京に都がある時も、難波宮は副都として賑わいました。ですから、難波と平城を行き来する人々の姿は絶えなかったことでしょう。

当時、難波から平城へのルートは何本もありました。一番オーソドックスなのは、現在のJR大和路線（関西本線）の道です。この歌の作者の通ったのは、その道とは異なり、生駒山越えの道でした。生駒山を真っ直ぐに越えていく、距離は近いけれど、勾配のとてもきつい道でした。

第一首は、都で作者の帰りを待っている妹（万葉集では妻とか恋人をイモと呼びます）への難波土産に、「難波潟の潮干のなごり」の

風景をと歌っています。今の感覚では難波と奈良はとても近く、旅という感覚には遠いのですが、自動車も電車もない当時であっては、しかも大和国と摂津国という異国間の移動なので、歴とした旅でした。その土産が難波潟の潮干の風景でした。

当時の旅は危険に満ち満ちていました。ですから人々は特段の用事がないかぎり旅をしません。ですから海のない大和国に住む人々には、海は格別に興味ひかれる対象でした。

「潮干のなごり」とは、異説もありますが、潮の引いた干潟を言うのでしょうか。一面の砂洲が広がり、ところどころに潮だまりが残り、また岩礁も姿を現しています。近づいてみれば、岩礁にはみずみずしい海藻（万葉集では「玉藻」と歌われます）が付き、潮だまりには小魚が元気よく泳ぎ回っています。日頃海に縁遠い人々は、潮が引き、また満ちてくるとい現象、そしてそれによって生じる、風景の大きな変化に、格別の感動を覚えたことでしょう。そんな干潟の風景をリアルに語ることは、都の家人には最高の旅のお土産だったのですね。

第二首は（この歌については本館報40号でも少し触れました）、峠から難波の海を眺めての詠です。眼下には難波の海が広がり、海面には明るい太陽の光がサンサンと降り注いでいたのです。そのさまは、太陽が難波の海を、押し照らしているように見えました。そこで作者は納得したのです。「なるほど、難波に「おしてるや」という枕詞が冠せられるのはそういうことだったのか」と。

今度、生駒山に登った時、はるか西にかすむ難波の海－当時とは違って煤煙に翳んでいます－をご覧になって、そのかみの作者の感動を想いみてください。

大阪には、この他にもまだまだたくさんの方葉歌が詠まれています。機会を見つけてその地を訪れてみてはいかがでしょうか。多くの地は万葉時代の風景から大きく変貌しているでしょうが、その地に立ちますと、1300余年

にわたる人間の営みが、幾重にも層を成して、現在の私たちの想像力をかきたててくれることでしょう。